

朝夷巡嶋記

第六編

卷四

13

704

29

5 6 7 8 9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 2 3 4 5 6 7 8 9

13
704
29



明治三十八年
十月九日
購

ウエブストル スーパリング 獨學 冊	神代卷 冊
第リートル 攪學 冊	地方大概集 冊
皇朝戰畧編 八冊	金銀圖錄 冊
小學素讀本 二冊	橫文守獨替古 冊
洋算学	前川源七郎様

大阪心齋橋横町
久寶寺町南入
名西洋美術
全一冊

朝夷巡嶋記全傳第六編卷之四

東都 曲亭主人編輯

後輯第五十五

由井濱の奇貨
執權邸の交易

朝夷三郎義秀ハ兄常盛と共に宿所へかへりんとて死浦大郎ハ
川田られて且渠ハ其二郎ハ其父の兄あるよしを聞か有敷きよろしき置れども
又之の領地を奈路のそと常盛といふを呼ばぬ其の死は聊所要あり
家兄と先を還らせぬと上見矢の趣と奈路の大人は報ひひこのま
常盛あらぬと然る和殿の後者ハ舊の侍に送られたる大人の候不樂の
人ハ所要果々甲夜の間にさく還すまへとてされて義秀一談及ばまの宣
はるまでもあるに其が役者と皆送されんをうたはるは彼賜の鑑櫃を背

月編卷四

肩を為るれば只一箇の奴隷とて且くも不苗び一某の年来民間小
 成長之身と浮萍のよも定めも獨行のしとけむ後者のより火とて
 事よ益るその餘のれのみ悉くせんと推辞が常盛微笑然り
 とそも鳥夜多蕉火と兼るれり道の程も便るる人小西二人を思
 べといを義秀のせむ否所西女といも要時の程へ暮果女間は退るるん
 西二人と要るるといも常盛強ても苗めど少くも隨意のひに還り宿
 所はゆんせと應之恥て一人の奴隷とていふるさうつあは選り義秀は別
 きくしそくち鳥の海面黎む黄昏時袂涼に浦風は吹送るる主後の
 家路をさして還りける義秀要時目送りて遙後方小退死居る浦太郎と
 呼迫つけは何所の所要ありてこれを頼み引苗めたる彼藁二郎小異父の
 兄弟ありとばざりし小舊里ありとていふるこの地に住る故をわめ日や

暮るる小つとあふとくはげんとしそが浦太郎声を潜めく縁由を知
 りひびひ疑ひハ理り僕この地は流浪し人の招塔とるなり一首を
 箇様々々尾りといは如此々と継父苗四郎があらを汲く弟の家を
 嗣せん為る置養小下野る赤貝と逐電し方支の趣介後小壺よは求め
 由くる浦平が塔養嗣とるなり又浦平が仇るるを捕へんと
 欲せ故小身上いよく衰へてせんまの死き小女房檢枝が叔母を和
 家の奥に仕なる守戸の局の汁貝より且くを柱とてどもそれのよあぐ
 薪炊の代り足るべうもあつて去々歳の春女房と武藏の太田遣
 一々廣綱朝臣の莊院へ給事よまわらせし小女房檢枝とカレし又
 あり日小太田へいれり檢枝と訪ひりてさよとひるる矢口老藁二郎小
 呼白られり渡船の為体まて送る告ぐさその年僕がこの年末弟は宿

所と知らせざりしと渠も亦兄を以誠心の篤たりの遭は故郷へ伴て家と
 議らんてせしむるめ遭ぬとあやまきよりありし母思をい々矢口も
 心ゆく志をせざるは傍に漕別れ宿所を還るを再なる継父苗四郎大の
 枉死の事又朝夷さるのん好意ゆく寛家の軀を刺さるも吉見冠者の恩
 義を感しき舊里へ立ちて鎌倉君も後ひひつる由縁あるま田敷の
 大田莊へ赴たき姫への仕まるの緯の顛末云云といぬ日校枝が物より忠
 具小傳するも心懸は隠れとも終つ校枝と嫂と知るも恨られせん
 然るともいふ誠心も還る不實のれなるるま田敷の鎌倉君も閉籠れて
 をいませば大田の莊る奴婢も己が皆離散して今中隼人ぬと
 校枝葉二郎ホのさるる彼姫への仕まるののらまとけえり
 此の地へび彼地へあはくあひ心を校枝は告葉二郎は對面して時宜より
 これも亦且く彼知し足を駐めく妻と弟の資ふるこれ姫へのあはれさ
 かくてもこの浦あて世渡り便著のるる骨を惜て何せんゆとと軀を
 その明の早ぬるび太田へ赴たき一宿のあつ次の日小彼莊院もあはれ
 あはれふえ宿所りるる焼亡れて人影もあはれ宵のほはれ今ゆふ
 いそ惑ひを解んとく近死里人許立より縁由を語りぬ地方のれは定ま
 ありぬど鎌倉より討ちとく稲毛殿のれは謀橋間管六とい和郎が
 殺兵をぬく竊ま末の同中隼人守直ぬと村長の宿所へ招たきいと
 ちろくく祟られしその宵莊院へ推せき矢庭の姫へ主後と搦捕へ
 ちこれ守直ぬが防戦ひ又彼校枝葉二郎が殺の敵を搦攫し磔の
 ごとく投退けを闕窺するのれもわりのめて莊院に火をける煙は紛れ
 守直ぬと姫へ俱なり往方もあはれ波落させぬ口痛く

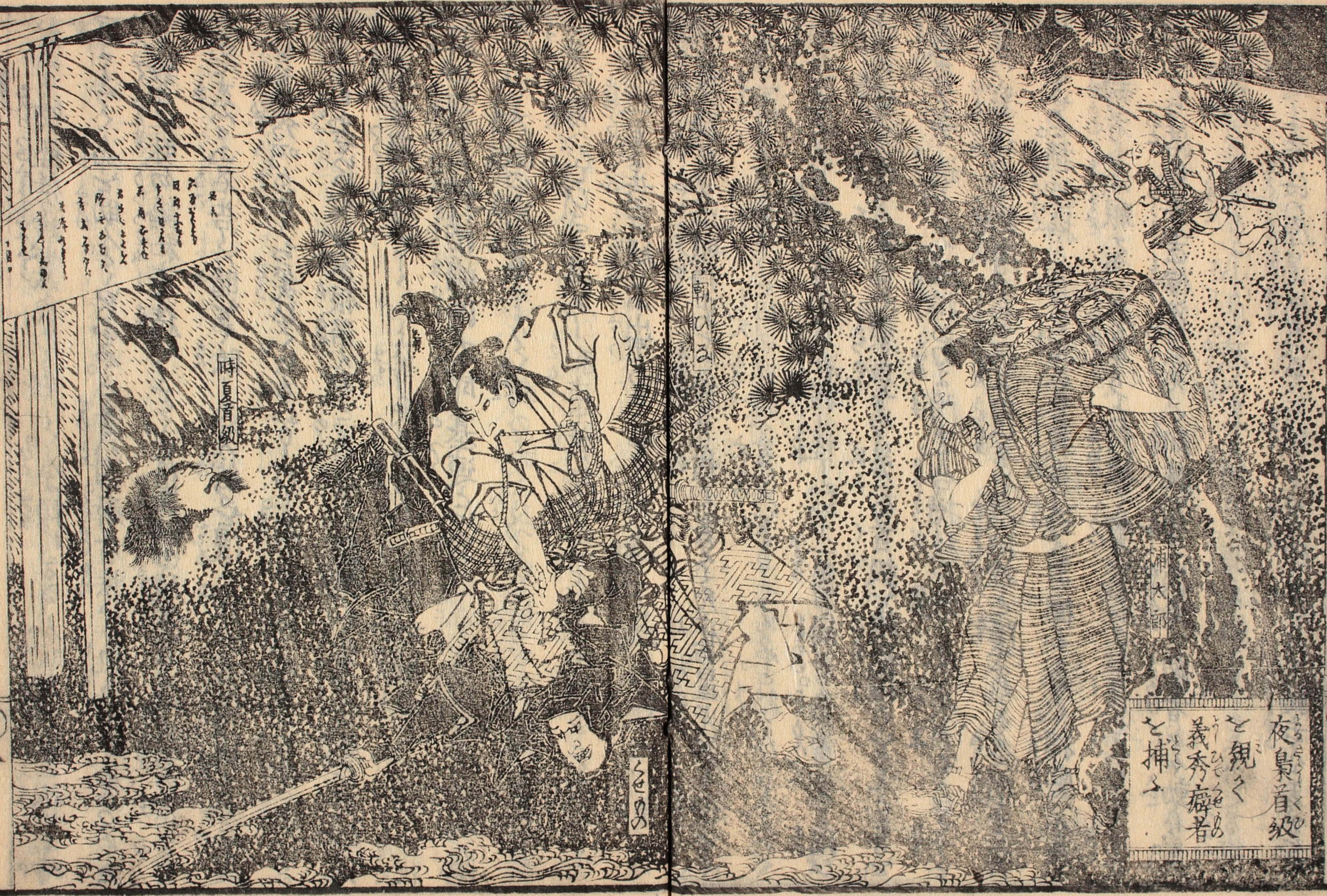
月長六編巻四
 三

腹せれんと朽ぞく覺期を究めりける折よく大人の詰末めひて上の見
 糸入りめべ潜込の技をさめられく死を脱れりてさるるむ獲るのり
 ける兩隻の鯉を捕りて陸に引揚義時主の免させぬ仇を刺して
 年才の宿望を遂さるめあひぬ洪恩の鎌倉山よりる高小壺の海
 よりの深く葛葉二郎より僕より御庇よりと父と外舅の寛おの軀と
 刺るるも大なるぬ過世ある契とを思ひなれぬ今より僕と葛葉
 二郎と思ひ召くつくまでも使せぬこの身ひとつと弟と二人并る内思入
 り命とけて仕んと願ふるをうちけし且田殿の奥がのすく落させ
 めひりも妻と弟が忠死のりもど報知しなえと不覺心せれて
 長物より小日とらうし御足を駐めなれとを礼をさしめひりと辭せ
 るく其れなる人の誠義秀の且感と且憐とと懃然とと嗟嘆と勝原

来葛葉二郎の義は仗と嫂と共侶は命と捨し欲健氣を吐くが如しの汝達
 夫婦も孝友忠義今の世もよくぬる死一家の美譚彼弟のこの兄
 のりあの良人ゆくと彼妻あり便を求めり田吉見両友は報知せん只心
 りとる死の且見姫ののりさされ間中守直あはれものもく潜ひて居ら
 され亦竊に往方とさめて光仲夫婦再會の方便も其処はあらん。死
 示もべ死の問へ死のも言られ夜の濱邊に立在ていつまでも密談を死宿野
 びりて意中を盡さん汝もこれに跟く来よとのひら後方とんえりて假屋のうま送
 される後者を招けり。鎧櫃と背負してわたり去るる程は浦太郎推さめく
 今要時等も僕も召れよまのりわりのく續松を七あらん。死は立義秀の
 遽く呼とめおれぬく鳥夜多りて道路平坦るあらりる星光あて事足れり
 誘とくといとて先よ真沙路は夜の夏る心地と風は吹れり程は浦太

郎其死くけり人由井の濱邊の彼経任時夏ホが首級許す梟られたる
 罪惡と示さるるへの人を多く欲せし事も將軍の壺の濱邊の御假屋へ
 出さるるは憚の関るたはわらねよくなることとせしむるとぞ就くいと不思議なる
 経任時夏ホが討れ四月十二日の日とせしむれば既し四十餘日の日数を歴る
 首級ともわく。且今炎暑の比るる府も燭もせむとる人奇妙のりゆらぬ下
 ぎの風聞は件の首級のゆる月鎌倉へ来る比みる梟るる死の比るる執權の
 大殿の時政の彼時夏と貞親負ふべきこととるる拒みぬひら斯き日と過され
 しを秩父殿の理を推し。老むく催促あひければ今のちや大なるを府も
 爛もあつて。今朝よりその梟られしその首級のみ生る好くまき
 とくあつてより執權の案は相違して呆れてとまらぬ。いふの人の
 悪言あや梟り死時と大く延して今求むる世の人のよる評判するおとと

潜め死告れば義秀へうち合咲は領を然るがより便路を遠るの
 らぬ向寄の誘濱はひよあそをんとくあつて只管歩の運ひを
 由井の濱邊へ赴く程の宵のち初更は迫るりの當下義秀も奪う彼首
 級どもの腐爛せざるの陸奥のとき高利ホと相謀り浮槎道人を
 授け茶水とて浸せ。故の時政れを知れば既許すの日と過る今に至る
 梟りたるは時夏が死後の恥を掩んとするの事とせしむるは梟る鷹揚
 その刃の恥をかりよとる府も待た疑ひあり。あつたれをの首級の腐爛を
 ぬ天の眞罰且茶水の経験の空のぬを知り不足れや天のまじく民を奪う
 天言ぞと民のいひむ。さればそれ時政が機密を揚り世の評判の肺肝を
 視るが如いと怖るる。と獨みづら肚裏は過おる。とひひわて
 只管よる程は忽地後者をとる。とつれ今逆徒の首級もとも燈燭もつる



時夏首級

夜鼻首級
と親く
義秀癖者
と捕ふ

おのづから経任が残黨ありあむとて人々頼れるるに明々地は首伏せよ時
 宜まよとく命を助んとせむと責問の癖者怯る氣色もきあむゆり死
 穿鑿三昧勿論和ま猜せざとこれ豈賊の残黨とんや主君の密意を
 稟てまつる名告の晴を眩しも然るを漫索するに後悔さるる罵之
 まと義秀呵々とち笑ひくとちあひらうまの名も汝が名氏も云云と有はる
 俣よりちおせいの息の根苗んむと罵りまう蹴倒して隻足は壓を蹂躪し
 癖者苦痛は堪びとや等々名告るべしこれの執權家の内を主役
 二代の近習の侍湯嶋沸太郎基連といふに今宵時夏の首級を隠
 せとある大敵の密意まよとく縛のあふる好もやも執權は後より
 必采へ恃へとびぶるのゆる和主の其処まあろあふこの縛とく解なま
 これの主君ま告む後日の出衆あまるとんや喃々と威ら驟ら口説く哉

義秀のあむ再声とゆりまよとく推察し違ふとて執權の家諫を
 せといふく免つて世の人の時政親子と虎狼の如く怕れもせんこれ彼奴
 求るとる利もまよとく勢ひは附んと欲するのゆるなまよとく時政を怕るん
 汝ら彼家也機密は預るのゆるとてぬらび回公とあり是れ小田藏
 人を冤屈の罪小陥れる謀は誰が所行なり時政の伎倆もまよとく必義時の
 奸計あるん此も隠を實を告よのゆる甘骨と踏折るべしゆめやうくと責
 問毎ふ足不旅月力と踏入れ佛太郎は西三度知らむくとまよとく程は漸々
 千曳の石を厭ま打ら似くゆく息絶々ふるり霜枯野邊は鳴虫よ
 やもる月細やる声立てやよ要時寛べとやまの為まよとく命は換るのゆる
 平彼ま田號と陥れる謀は大敵まよとくみる郎君の計略也某密議を
 奉て是れ病病は假托く湯治の暇を請まよとく竊は奥へ走らむとく

軍の勝負士卒の進退光仲ぬの執行する支の趣送もるくくは府
 見ぬく彼凱陣先走りつと云云と具に郎君報く更
 又稲毛殿親子と閑談ひひ尼御堂と驚又光仲の長唐櫃とよ
 相似る長唐櫃と四棹造りく驟雨の途中にあつて云云と計やく罪を
 負しるその折供物の假宰領の面目をけれと某の好も主命あれば已
 ことゆさうのつご大殿も郎君も光仲ぬを憎もあつた一朝のゆさ
 鎌倉も下野も彼人のよゆ故主のころ小背たる宗をいせ
 いえたひい果の抑和夫何人なるも主君も憚と猛者も量の
 りけるふ謙倉武士のよゆと起くあひと啣言のくち勸解
 ると義秀つてあらんは類もろ名を問へ主は告るといふを今名告ら
 ぶとも後あ知らん既首伏するをこれ決とは殺さ然を今あ
 かす棄物として送らん重要時暑さと悪くとあひの随ひい懲ら
 浦太郎とえりく鎧櫃と所要のりそのあん體を川中と櫃のこを
 あつてとくといをて踏まふける沸太郎が項髪をひと搔攪く
 宙に吊りく件の櫃へ推縮め換込く蓋りて壓く舊の如く鎖かけ
 打敵たあ沸太郎命惜くあつた出まき声を立て扱も仇骨折ら
 先休んと鎧櫃を尻うちらる大勇大度と浦太郎の直と呆れて彼後
 者があつるを今と待りける浩処は供の奴隷の稍蕉火を買
 振照らる本をけれは義秀ヤヤと呼び迫つて且浦太郎云云と差
 示しあろはと郷の沸太郎が滾し落せし時夏首級を取揚
 もをの如く梟さうら掃枝を拾ひ取りと鮮血を拭き遠く懸
 奴隷といふこの猛要支と時政ぬへ赴くははのあん體との

あつてとくといをて踏まふける沸太郎が項髪をひと搔攪く
 宙に吊りく件の櫃へ推縮め換込く蓋りて壓く舊の如く鎖かけ
 打敵たあ沸太郎命惜くあつた出まき声を立て扱も仇骨折ら
 先休んと鎧櫃を尻うちらる大勇大度と浦太郎の直と呆れて彼後
 者があつるを今と待りける浩処は供の奴隷の稍蕉火を買
 振照らる本をけれは義秀ヤヤと呼び迫つて且浦太郎云云と差
 示しあろはと郷の沸太郎が滾し落せし時夏首級を取揚
 もをの如く梟さうら掃枝を拾ひ取りと鮮血を拭き遠く懸
 奴隷といふこの猛要支と時政ぬへ赴くははのあん體との

推考くして云々と殿原は嘆息のげよ。樞の聊所要あり。浦太郎は肩して之
 りんざびれの蕉火をみるおせえへいと言ふ半のちりてのたのこころの奴隷と
 ありぬ果て五六束の蕉火を分ちて浦太郎は遞与する。鎧を肩もち
 けく隻又も照らすを蕉火の夜行の花の西東別れて家路を還りけるる
 程は我秀の樞と浦太郎は背負く若宮巷路急ぐ程よその宵二更の
 左側は執權第をまよければ前門をうち敲たつ用くと遅くと衝し入りて
 玄関よりち登り執達人より対ひて夕口は博とさう知くぬれぬ。其を
 和野の三男將軍家より徴れら朝夷二郎義秀之今朝参禁程もる。
 小壺の御假屋へ召さるあひく上の見参入のなりぬ。この執権ひともさうさへく且
 執權小拜謁して認るれぬん為よ夜を犯し推参せりこのよ。徳へあひて
 いへる人ありとて山口状の趣承りぬ帳面は記し置て後刻主人のさうし
 せん夜支の出来候は疲勞するんといへも果て義秀の眼を睜り声も立て
 こをせれける執達人の帳面は記されて翌告ぐてのたのるる甲夜過
 するふと今執權は對面を請ふら私に故るは是執權のありて
 國家の大事は係れる議のそをも聞かばと云々と挨拶する。鳥辭
 とやらんを礼とやらん和郎が今とさうあるる。餘の執達人もくおれ執
 權對面はまの還るれらと敷圍く疾視睜り一面魂を奪ふ。そのふれは
 執達人の阿容々々と後堂を去り義秀ののれりもを時政は報へる。時政は
 眉根を擡めその朝夷といひ奴の傳稀る強者へて豫くはり。違はりけり。
 渠今大吏を告んといふ對面をせらるる強ん。こをせりて馳く夜
 裳を整り客房を坐とて呼入れ對面を當下義秀の進を入んといふ。且
 する。時政は後方から大刀持の童扈後より左右に兩箇の近習のを置並べ

せん夜支の出来候は疲勞するんといへも果て義秀の眼を睜り声も立て
 こをせれける執達人の帳面は記されて翌告ぐてのたのるる甲夜過
 するふと今執權は對面を請ふら私に故るは是執權のありて
 國家の大事は係れる議のそをも聞かばと云々と挨拶する。鳥辭
 とやらんを礼とやらん和郎が今とさうあるる。餘の執達人もくおれ執
 權對面はまの還るれらと敷圍く疾視睜り一面魂を奪ふ。そのふれは
 執達人の阿容々々と後堂を去り義秀ののれりもを時政は報へる。時政は
 眉根を擡めその朝夷といひ奴の傳稀る強者へて豫くはり。違はりけり。
 渠今大吏を告んといふ對面をせらるる強ん。こをせりて馳く夜
 裳を整り客房を坐とて呼入れ對面を當下義秀の進を入んといふ。且
 する。時政は後方から大刀持の童扈後より左右に兩箇の近習のを置並べ

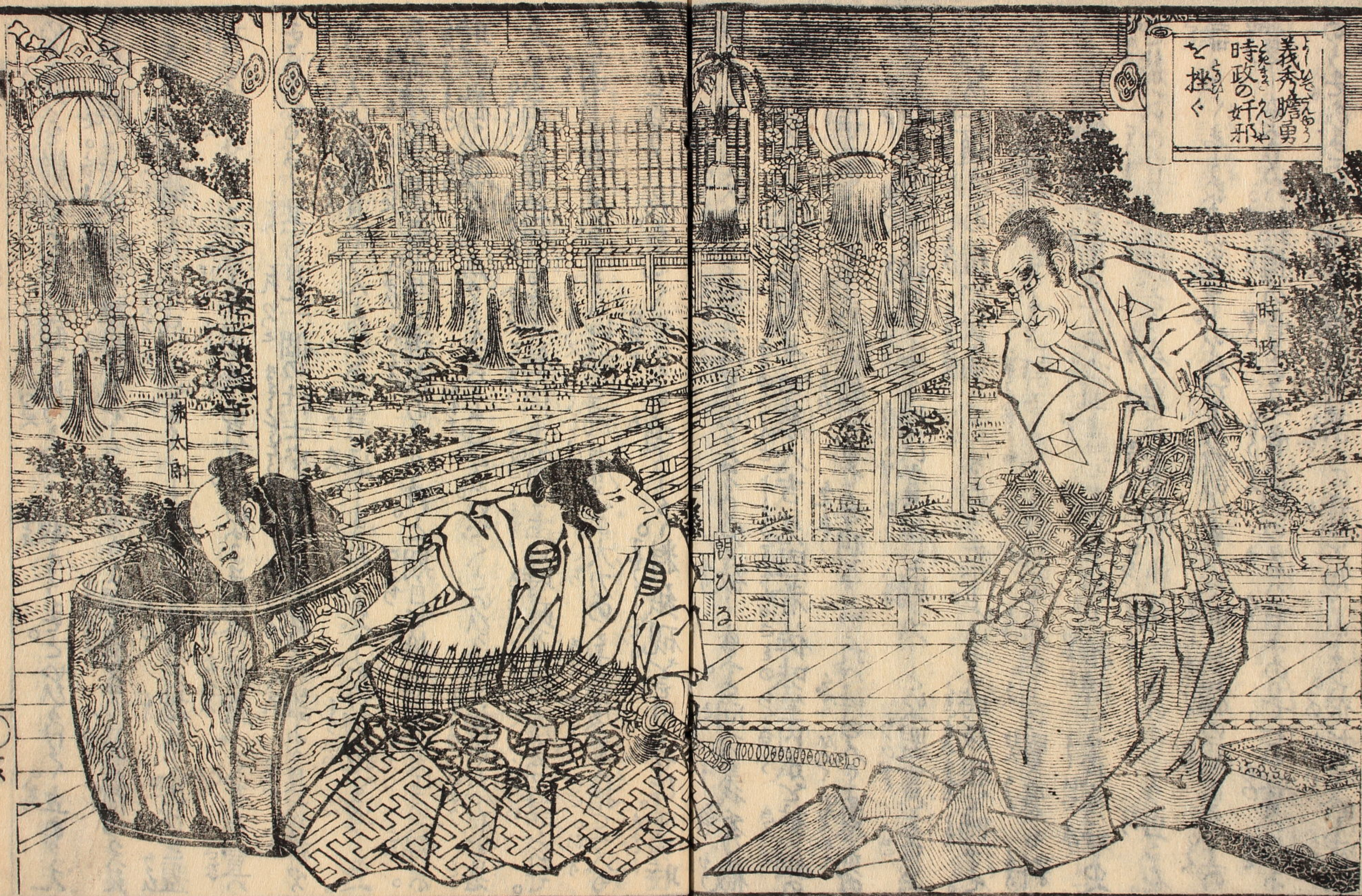
たゞそのよりあひひのこゝろ一箇の家謀が遠く外面走り出り且く雑色
 二名よ件の櫃と扛と廊下よりとあるを義秀側へ居措くと又時改まら
 對ひ某君父の愛顧よりくぬび鎌倉の水を飲み又鎌倉の飯と啖之。
 將軍家に見参する幸ひはぬれども年来浪人ありければ今執權に進
 ざる苞首のも絶てる。只今宵由井の濱邊を圖るももよりの古今
 未曾有の禮あり先この禮の奇特とら。トこれを空穿の心は奸佞隠
 匿とある逆徒時夏が首級と竊とて隠さんと欲する奇特ありぬび
 これを領かたの腹心の家謀としく假唐櫃と造りて賊徒退治の大功
 の先仲と克屈の罪は陷る機関あり況る吉見冠者主役佐味空内
 高利るしふ幸たのをえざる機関の皆の禮と化ける王臣の隨音掃故
 る。され又そのこれを措くとその稻毛が腹心の家謀と太田の莊へ遣り執

權の密意と倡へ且見姫は逼迫く辱めんとする機関あり。されこの禮と名
 けく遠相三洲の父子繩目湯が嶋威と名つけたり奇妙の物ありと數
 立る隱匿の胸は對する主役の食顔の色蒼蒼なり根くまう目と指し
 裡面をたゞた遣の櫃は解ぬ惑ひの父子繩目心の底は沸く湯崎が備為
 損ドく生拘られ歎首伏せ歎れれるの歎きまうると同よりもあるとそ
 秋の曇の草隠れ滅も入りた心地し。齊一太息と吻をけり嗚呼奸臣位
 のこと忠良多く虐られて暗君掛の殺るとあるむ。當時鎌倉の形勢を
 思ふは呂后政と聽王莽攝とるふ似たり。只朝夷の膽勇あり千軍萬馬を
 擊塵けて人るは郷に入る如く。思ひのまゝの時政が奸邪の意中と控えて然
 とく櫃よるとのけ某既この禮の奇特と具述されども。面りよんぬ
 終る不疑るるもあべ。且看一看て言の傳るるを知らぬひのこゝろ

自ら鎖推用之。蓋揺除れ、沸太郎へ縛られ、ついで頭を擡て出
 んと云々。是ぞ時政主後、目と目を指し、つけられ、いよいよと云々。小駭
 騒ぐ主後、尻目みゆる義秀、八達を益と、沸太郎が頭を推被せ推
 籠り、鎖さう固め、ぬきびきを執權いへえ、ひく欲見、夫の妻、生物よ
 進らま、うぬひも、まのま、六檐石の儲も、うり、浮浪の某、今とて、も
 親を被る、身、この奇化、負と故、く人、贈り、う。ゆ、ふと、商人、や、ね、
 り、や、千金、萬、緒、と、も、賣、て、利、と、射、あ、ら、も、る、一、只、某、が、望、の、け、と、交、易、さ
 ら、進、と、せん、ゆ、と、も、望、ま、せ、の、ま、の、と、う、と、親、よ、告、翌、回、註、所、へ、披、露、し、
 鑑の奇特を顯し、七上の水沙汰は任まへ。夫執權の國の棟梁、諸侯、士、大
 夫、萬、民、の、善、惡、邪、正、を、監、と、改、め、の、ん、元、職、分、る、よ、只、この、鑑、の、故、と、り、て
 三年の勤功画餅と、る、ふ、惡、名、も、亦、隨、く、後、々、ま、ま、ゆ、ゆ、べ、ら、れ、其、この
 説、と、ま、よ、う、嚮、ま、る、老、の、為、と、い、ひ、ん、即、老、婆、親、切、を、交、易、ま、れ、各、利
 のり、送、の、損、の、ま、れ、物、も、と、と、く、尋、思、ま、あ、ひ、ひ、と、辨、せ、ま、く、同、結、を、時、政、の
 心、も、る、も、と、又、死、眼、と、因、く、肚、裏、も、も、ま、う、且、襄、も、重、忠、能、負、ホ、が、逆、徳、の、首
 級、と、鼻、よ、と、く、類、の、不、詳、ひ、諫、し、ん、と、も、経、任、ホ、い、ま、れ、の、ま、れ、時、夏、の、當、初、
 り、執、立、る、副、將、も、り、と、その、首、級、さ、よ、衆、ら、れ、急、い、む、く、り、恥、る、る、べ、い、と
 思、い、し、れ、れ、と、拒、ま、る、の、の、ま、う、く、日、と、延、せ、う、と、も、重、忠、が、ま、の、め、く、執、念、際
 論、と、こ、ご、ご、の、義、秀、も、亦、參、著、の、時、え、の、ま、ら、も、措、れ、も、彼、首、級、共、と、今
 朝、も、ん、を、由、井、の、濱、へ、鼻、と、せ、ん、素、と、り、ま、ら、あ、る、ひ、も、亭、午、の、比、より、將
 軍、の、小、壺、の、濱、へ、ま、を、あ、ら、衆、人、ま、く、憚、り、と、首、級、を、知、り、れ、掃、る、
 べ、衆、人、ま、く、然、後、問、ふ、彼、時、夏、が、首、級、を、の、取、隠、さ、せ、ん、と、思、ひ、は、竊、よ
 湯、嶋、沸、太、郎、と、彼、如、遣、し、う、け、ふ、折、の、う、ま、く、義、秀、奴、は、撞、見、く、生

義秀 膽勇
時政の 奸邪
と挫く

時政



辨太郎

朝東六編卷四

廿

のと然るを難法あるの鐘と携ふるべし暇まうまといひけり立あぐえ
 とる程の時政速て推禁めそと亦あり短慮より最お悔つる死
 ところを力と竭く光仲ホとまう寛めく實を揣らん此が盟
 書と遞よきとも他言用捨あれといふは義秀居直りくそと宣の
 まるまでもる一某の是一個の壮士交易が成就せ誰あり耳は推め
 告ん人々勸賞あると死その書と返しまわらまうその折檻と返り
 これ亦後の交易あり互違犯のべり成と期日を推する勇士の辭小
 時政歡び領なくあらん安んじりいそくといひけり初く左右を見
 くるふ両箇の辺習も童扈後も嚮主の時政が義秀を同詰られて
 いと困りけりけるるは堪む痛痛さ大刀のこまの後方措て一人の
 とらむるのりくはあむく響ら鳴りく料紙硯とよりよはは聖時

按と一通と書寫めく遞与よけき義秀被さくこれをるる宿多田
 藏人吉見冠者佐味竺内等々罪科可被宛行恩賞事右
 件人々雖嚮蒙御氣色非其罪證批既分明也若寛其罪
 依其功可申行勸賞之旨今夜令約諾訖是議若及遞々
 若於有犯乱則日本國中大小神祇云云と折言文を書載く
 年号月日平時政との下は花押を七記したる文面といひ自筆といひ
 相違のへうもあふれば義秀甚然とうち笑るる遽く巻以り
 懐は林定と夾め執權書札の受取り鑑のこの後遞与まおれを
 更闌く宿所は罷りく遠りぬ吉左右と俟んのこま休らひひ
 ねと告別と身と起せば時政の家隸亦兩三名走り去りて
 送りけるのり程は義秀が甲夜は途より還りて供の奴隸の逸足出

今巷路る邸より、の緯云云と報し、義盛等とあり、ん後
者、野遣まへし、とく出せしを、これ若黨奴隷二十名、馬を牽て
時政の門前、を聚合せし、今時政の家、隸亦朝夷大人の、ん直さ
と呼ぶ声、若黨四名、のち、門内、進入り、く、左右、別れ、つゝ、
り程、の、開、不執、鑣、奴、を牽、居る、馬、小義秀、あり、と、
そ、伏、閃、や、と、う、跨、れ、が、前後、小後、野、の、役、者、浦、太、郎、さ、後、跟、
く、死、夜、照、る、と、張、燈、の、三、引、の、紋、五、六、張、八、の、欵、七、の、欵、鑄、々、と、曉、
鐘、の、音、と、共、ま、あ、つ、り、ぬ、り、ぬ、た、け、り、時、政、の、家、隸、亦、この、好、景、亦
呆、も、と、く、彼、人、を、先、本、ぬ、と、た、り、賤、夫、め、た、る、役、者、の、を、還、さ、及、び、
人、馬、の、數、の、大、く、殖、し、の、り、ぬ、と、わ、出、没、不、測、の、勇、士、ま、て、之、を、為、る、時、ま、
右、の、如、く、彼、戦、場、の、進、退、機、変、と、さ、さ、と、と、想、像、る、事、と、く、舌、を

掉、く、怕、を、け、主、の時、政、は、告、り、時、政、類、は、嗟、嘆、く、悔、り、
く、む、の、ひ、け、呼、膽、勇、剛、正、の、武、士、權、と、犯、し、奸、と、折、々、世、の、人、成、く、
愉快、あり、し、む、実、古、今、の、難、事、ぬ、べ、し、
後輯第五十六
團坐席の夢話
浮雲襪の猛雷
この夜、和田義盛、その子、義秀、が、還、を、俟、く、嫡、男、常、盛、亦、と、相、譚、ひ、
挾、夜、深、る、ま、で、い、も、終、る、と、し、丑、二、の、比、及、び、く、義、秀、を、な、く、へ、り、來、父、の
同、り、は、赴、死、て、郷、向、小、頼、家、卿、見、參、の、支、の、趣、并、小、壺、の、浦、人、浦、太、郎、が
事、を、報、し、某、お、り、の、れ、い、ま、は、執、權、の、宿、所、ま、直、り、遠、州、と、い、ふ、對
面、の、吉、田、吉、見、の、寛、柱、を、明、々、地、に、以、解、ゆ、ひ、は、遠、州、を、先、け、り、
し、證、拠、と、取、く、推、し、を、け、れ、疑、心、氷、の、お、と、く、解、て、執、遠、の、錢、と、肯、れ、り、

後輯第五十六

團坐席の夢話
浮雲襪の猛雷

この夜、和田義盛、その子、義秀、が、還、を、俟、く、嫡、男、常、盛、亦、と、相、譚、ひ、
挾、夜、深、る、ま、で、い、も、終、る、と、し、丑、二、の、比、及、び、く、義、秀、を、な、く、へ、り、來、父、の
同、り、は、赴、死、て、郷、向、小、頼、家、卿、見、參、の、支、の、趣、并、小、壺、の、浦、人、浦、太、郎、が
事、を、報、し、某、お、り、の、れ、い、ま、は、執、權、の、宿、所、ま、直、り、遠、州、と、い、ふ、對
面、の、吉、田、吉、見、の、寛、柱、を、明、々、地、に、以、解、ゆ、ひ、は、遠、州、を、先、け、り、
し、證、拠、と、取、く、推、し、を、け、れ、疑、心、氷、の、お、と、く、解、て、執、遠、の、錢、と、肯、れ、り、

執權評定衆の連署到来して貴所并吉見佐味の人々と恩惠の御沙
 汰のりこれより明日己牌己前義秀と相共におく當中とあれとあり
 下知と承りぬ是併義秀當所と参り者の夜まうと諦せよありといへ
 弊のまよ及ぶ秋量表の不測のりより人まるは義盛が預せなるとい
 凝氷をう登く解盡と止水一巨海は帰るるの飲びこれよまよのりい
 浴のり礼服の儲の専女守戸ホよ分付あぐこの意をゆれいといこ可
 啼よ止言ければ光仲の速く席を避く額をつた仰の趣兼の御定は
 よりして庶座を平龍居の旦暮と安く送るる苦中の樂不幸中の幸ひと
 して思ひ賢息参府の程もろく五曹の萬死を極て又天日とをせある
 洪恩高義の今ゆつと感涙の外いほを再會の果胸臆と盡をくいと亦
 他事もろく言兼けり義盛の聖の儲は暖るればとを退るる在柄佐味の

宿所々々へ使者と遣く飲びと告且登營の時刻と示し合はせるといふ
 彼人々より使往來くとこの目もろく暮ふけりされ日と光仲は諫ら
 たる守戸の局と男童ホのり文件のりの趣と傳はるといふ誰を飲
 とも命せられも奔ましと夜の長と待たひり明れ六月廿六日の
 辰の時をりよ和田左衛門尉義盛興義秀と光仲とぬる當中ホ参る
 程は在柄平太胤長と吉見冠者義邦と伴ひ佐味在內高利の河
 邊小三郎高吉と俱に合營中へ参りける且く件の人々と齊一正廳
 召聚合し執權遠江守時政の頼家卿の御名代々と上座あり
 左右の官令大江廣元河注所の別當と善入道善信のり先義秀を
 召出く廣元仰と傳はると和田左衛門尉の蔭子朝夷三郎量兼を
 誅伐のとれ彼地ふおろく軍功の時をありとせんと新規の御家臣を召

置れをらんぬ。但一相忘の願所なけれ。いも。在花園宛行れ。摺る。黄金と
 り。年別。如干兩。賜へ。宿衛の為。遠侍。同候。忠勤。抽せ。父左衛門尉。この誠意。よく。教訓。加ふ。命既。小言。訖
 軍監。と。彼地。遣さ。所。萬緒。進退。雨。よ。て。疑ひ。あり。よ。と
 出仕。と。止め。ら。と。い。とも。恩免。の。君。邊。と。退。け。外。様。召。置。る。の。并。よ
 光仲。が。使者。下。向。邊。小。三。郎。も。今。い。さ。る。御。用。る。今日。則。身。の。暇。取。ら。は。る
 進退。の。主。の。隨意。と。と。宣。知。け。次。は。義。邦。と。召。出。て。廣。元。仰。を
 信。吉。見。冠。者。の。曩。陸。奥。に。在。る。信。丈。社。司。が。摺。と。る。足。成。
 新。之。の。刃。丈。婦。の。賊。徒。の。み。擣。ま。せ。ん。御。方。の。英。氣。と。折。く。と。い。ども。最
 後。不。義。秀。の。資。よ。と。時。夏。と。討。捕。る。御。召。と。と。る。り。あ。れ。ども

光仲同意の。不依。く。多。向。疑。ひ。ま。あ。ゆ。た。の。故。は。在。柄。平。太。預
 置。れ。る。是。より。の。後。多。く。衆。議。よ。り。せ。ら。れ。る。寛。仁。大。度。の。お。上。旨。と。り。て
 此。度。光。仲。と。恩。免。の。御。沙。汰。と。り。ま。さ。れ。ば。御。正。と。同。る。不。及。が。且
 冠。者。は。其。浦。殿。の。孤。白。鳩。丸。と。り。て。その。時。あ。り。と。り。と。格。別。の。議。と。り。て
 武藏。國。足。立。郡。石。戸。の。莊。を。宛。行。る。件。の。莊。園。の。故。基。希。府。の。お。時。足。立
 藤。九。郎。盛。長。は。御。加。恩。の。地。と。り。て。その。子。景。盛。家。督。の。後。上。の。お。乳
 色。と。崇。奉。す。蟄。居。せ。め。ら。れ。召。放。され。所。へ。彼。盛。長。は。其。浦。殿。の。外
 舅。と。冠。者。の。外。祖。と。り。て。その。所。縁。ある。と。り。て。此。度。食。邑。は。賜。ふ。の
 事。の。お。石。戸。外。祖。の。御。中。と。治。め。て。洪。恩。と。忘。る。と。り。て。備。録。倉。君。は。お。大
 事。の。お。んと。馳。ま。る。た。條。勿。論。と。り。て。命。既。は。言。言。し。ま。と。り。て。次。は
 光。仲。と。召。出。て。善。信。仰。と。傳。へ。り。て。又。田。藏。人。光。仲。皇。表。は。駿。河。前。司

廣綱の願ひより経任誅伐の大任を假しその所勝負區々ありし時
 日を送り漸く義秀の次男より七賊徒誅伏せしむるといふも義秀を伴ひ
 せしと自分の功を倡へ賸不良の咎えあると和田左衛尉を預置けり。
 是より執權遠州父子竊ふその才を憐みその罪をゆるぎし頻りに
 まうし寛らるるあどとやゆく緯の邪正を問はせ所云罪の疑はるる
 功の著せを賞せらるる但し光仲の駿河前司の女塔あるよりその咎えありと
 いども彼人の家督の事を願ふと陣中より逐電し今日に至る
 往方とされ光仲家督たる由るのれが今ゆく小成家臣たるが
 莊園も宛れられしよりと沙金三百兩とて件の軍功を賞せられその
 暇を賜ふれし但し武藏國大田の莊に廣綱の私田あるを息女且見
 媛の所得とす光仲後見せんともその總便の議とて是非の沙

汰ふ及れざる廣綱の往方と素より彼人家督を願ひしと折ふ
 召入るる上ありきのみより御沈酔して今日も出御る一廻遠州を御名
 代とて誅意の趣件の如く各々兼知せられ執勢々違乱あるべし
 せしと嚴重に宣し衆皆齊一言兼て恩を謝し心を退出するのて
 義秀の管門の御より入るる立別れし時政の宿所へを赴きける
 管中より退れくればと咎えなくこれを候て久しうして時政は對面し執權
 前諾と違へざりしけのえ計ひを辱けしと就て誓言文一通を返進し
 某が鑑の櫃とてとるひひと催促し其の一通を遞与しければ時政は
 多く何れもゆるぎなく家隸し其の櫃と義秀より返すも義秀蓋を
 換取りしと執權これの唐山の鄙語よりか如く珠を返しく櫃を買ふと
 然りとて送は損益する但光仲の一議のこころを感心し天道の

盈るを憎む内家臣もあつたされど其壯園の宛行れを畢竟放る人な
 り。如くもこれに還るれば彼人の幸ひやあつた然其の優れる
 る。眠まるとと遠く外面へ立出で權を後者北月原の頼馬次
 まくく。馳て宿所よりけり是より先は義邦高利光仲亦を義盛
 胤長の後胤長と執權官令評定衆の宿所々々を巡る小江三三
 廣光馬頼標吉郎嗣忠城戸四郎武詮水草太郎五昌之亦の或
 主の供立或の途へ迎へ會營中の沙汰を多く聊愁眉をひたけり。
 此の件の人々の義秀が還るを俟て共々飲びと述を和国の邸に聚合
 して義盛の常盛と吉席とひつる酒食と差支管待と程は義秀
 此の亦よければ光仲義邦高利亦主後齊一と迎へ馳て上座を請薦て
 會飲びを述恩と感とて是全く賢兄の義勇の論議よりりけるん

嚮小執權と論らぬひとの有けるよりその大人のお物々りあて大槩とを
 のれり。詳は詳は甚麻る方便のひひと問へ義秀微笑て不口を
 るの亦あつぬと今誇負し止るも西女を某陸奥の諸君子よりりれ
 たり。如此々々のひあつとて。諏訪嶺の拂々の山山金九郎山路ホゴと初
 とて岩神の事の趣友鶴と天折判五が妻も世を遊し。鉄指矢藤五が
 田鶴媛が厄難頼繪の尼はこれの老婢送ゆる説示まよ人々駭嘆せ
 るもろく且友鶴の死と悼み頼繪の尼の教訓を只顧感伏せりける。かく
 不血の數も遠る程は光仲義邦共侶は廣細の遁世紀念の扇歌の亦小袋
 坂の厄難より士卒も忽地離散して身へ囚徒とるる古又の趣と物これ
 又高利高吉の賊徒の首級を賞と先ちとある甲斐もろく因に詭られる
 古又の形勢箇様々々と光仲亦過ちるを耳に常盛小壺の漬やく

義秀が用紙と水戯の爲体と義邦先仲亦は況示せば胤長も亦重忠の
 論訴より一昨日より任任が首級を鼻られ事の顛末を語り出で
 七尉ゆけるが程は夏の日の飽ゆ團坐を傾け胤長の宿所は退りく
 後姫ふけの首尾を報知せんとて人々は告別し後者をいそがせ出で
 常盛の又夜醜の儲は且く奥へ退れける當下義邦高利亦先仲を
 つくそを喃藏人ぬりかくまひぬる再會の面色のうらたれ大功ありと位
 階を削られ一所懸命の莊園に宛行れ故よりとていへ先仲頭を掉りて
 いそふははとある人徳薄くして任重く進をそめ退るる誰よりく九
 龍の悔るれことをいづくや朝夷ぬの恩義我より幸しく免れりこよ
 幸ひるものれをよその餘を願ふ某が心の憂は然るもあはれ朝夷
 ぬも皆の某の日の曉るも怪し物と獲りて彼老実僕

菅原二郎は且見姫は使る校枝共侶一包の袱物を携り某告す
 嚮は姫へのめん小俺們兩人相討ひ校枝が叔母守守戸の局は便
 なく見消息と届進らせり小和田殿の時政ぬと邸を替はるひ一
 夢小もまきと執權邸へておはるるあはれと推返され悔く
 包も封皮も舊のまきと異なるべくもあはれ贈物の
 魚酢あるよとまき校枝を和和田殿の局門より守戸は遞と
 ゆひたまはる件の魚酢の中列は毒を入れられを殿中狩り
 ども縁由を知り召ね姫への疑ひある魚酢のあはれ書も
 大殿の細のめん紀念するお扇は返さるる二行半のめん歌は姫へ
 歎くせしめん自害とをえし僕これを林に爲す柱へ縛めおせて腹
 切つる折し校枝も過失を悔ひ歎つる共は刃は伏る刃の終り



今巷路の
中きり
郎は美我秀
知己主徒と
再會も



このとら枝枝を嫂と知るも甲斐なき今般の内兄弟只俺們が首級を
おん身は行はるるやと殿へいと死めんとを。又もくも姫うまきう送しつけれ
ども姫うへは只薄命をうちも歎せぬひつ。おん頭髪を剪らぬひ死かぐく件の袂
物はおん黒髪と一首の歌と包添さぬ折うう稲毛が家隼橋間宮六殿
兵をねく推寄せまらうとや狼籍及びいへ間中隼人大く怒りく且く防
戦のりう大敵をれば既に危く遂に件の袂包と包六は奪界されく姫
うまきは敵の為は捨とるせぬあきう厄難を守護しなる俺們既に身は死
まればもひ詰る魂魄はるるおん身はるるをまらうとと間中隼人は力を勤
しと殿の敵と戦ひ惱み袂包とより復して在院は火を放ち火攻めてはれば
敵のいづく周章まらう幸とて逃亡しつ。ある程は姫うへ間中隼人を免供と
恙もあは落さぬひつ既にしと伊豆國なる藍玉よとらませぬもまご御刺

髪までおの及せぬら俺們匹夫の思慮短く大切なる姫うへのおん贈り物を
仇は遠くしと殿と詰めなり。新姫うへは濡衣を着せまらうとて飽姫妹
伎のおん中を列衣れしものうそまらうし解くは死うまらう。数多るぬ身を
殺せども誰り亦姫うへおん行はるるを殿への傳へらうとて死口このゆを
あふの故は身は二熱の火坑に墜し。六道の迷ひ亦存る時。朝夷ぬ上録
倉へ著せぬらおん寵り居も恩免あせぬ。解厄の期も遠く願ふ
伊豆の藍玉より姫うへを迎せらうと更は借老同穴の契りと結せぬら。
言露なるも偽りあるぬ證拠の為は姫うへの袂包とをたまらぬ。くうち披
たんとまらうと疑念を解せぬら。と某二郎が死口説は枝枝も共は
語を續く潜然とうち泣けしと某敬篤は且憐とて之を詳に問とせし。
二人の忽地身と起し。面影さへは初は似む髪より乱れて凄しく鮮血不

